

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。

## 五念門の研究

―特に瑜伽行の一環として―

岡村泰祐

五念門とは世親が浄土への往還二路の行として「往生論」に説き明かしている所のものである。世親は瑜伽行派の論師であるかぎり五念門を研究する場合、世親が立脚している瑜伽行派の教学に基づいて、その解明を行う

ことが世親に最も忠実な方法であらうと思われる。この「往生論」とは世親の実際的な瑜伽行を示すものとして書かれたものであり、この論に説く三嚴二十九種の莊嚴等は無著の攝大乘論に浄土の相として説かれている十八円浄説に基づいて書かれたものである。この「往生論」の構成は偈と長行から成り、偈文は五言二十四行あり、初めの第一行に礼拝、讃嘆、作願の三念門、第二行は世親自から仏教によつて願生偈を作るといふ造論の意を表わし、第三行以下に浄土の二報三嚴の功德莊嚴を説いて觀察門の対象とし、最後の一行に願わくば阿弥陀仏を見奉り普く緒の衆生と共に安樂門に往生しようとする廻向門の意を述べているのである。そして長行は願生偈に説いた所を説明しながら五念門の行法を説いている。この行法の内容が即ち礼拝、讃嘆、作願、觀察、廻向の五念門であり、これを修行すれば安樂国土に往生することが出来るということを説いているのである。つまりこの五念門行は浄土往生のための実践と言うことが出来るが第五廻向門だけは安樂浄土から往生を願つた現実の世界へ

向く行である。世親はこれを入出二門としている。又世親によれば「往生論」の中に更に五功德門の説を掲げている。これは五念門を修行することによつて得らるゝ所の功德を説いたもので、(一)近門、(二)大会數門、(三)宅門、(四)屋門、(五)園林遊戲地門の五門である。この五功德門も五念門と同じく前四門を入の功德、第五門を出の功德と二つに分けられる。

浄土往生の第一行の礼拝門とは「往生論」に「云何礼拝身業礼拝阿弥陀如来応正遍知為生彼国意故」と説かれていゝように、これは身業の行であり、彼の浄土へ生れたいと言ふ心を以つて阿弥陀如来を礼拝するのである。この礼拝門を修することによつて近門という功德を成就するのである。阿弥陀仏を礼拝して安樂浄土に願生すれば正定聚に近づくのでこれを近門と名付けている。

第二行の讃嘆門とは「往生論」に「云何讃嘆。口業讃嘆。称彼如来名。如彼如来光明智相。如彼名義。欲如实修行相応故」と説いていゝようにこれは口業の行であり、口業をもつて彼の如来の名義を讃嘆することによ

つて相應行を修行せんとするものである。口業によつて称せられる名号が光明智相の義に結合したものでなければならぬと されているが、無著の「大乘莊嚴終論」と所説と關係させて第二、第三、第四門をみてみると、如来の名を称することによつて奢摩他（止）が行じられ、義（光明智相）を緣することによつて毘婆舍那（觀）が行じられ、この名義の相應はそのまま奢摩他・毘婆舍那の結合であると説いており、それ故に如来の名を称し如来の義を讃嘆するという讃嘆門は奢摩他行・毘婆舍那行の前提となることが知られる。つまり相應行を修行することが出来れば奢摩他行・毘婆舍那行が容易に実践できることになる。この讃嘆門は「大会衆門」と言う功德を成就する。如来の名を称し、如来の光明智相を讃嘆することによつて大会衆の数に入ることが出来るのである。つまり聖者の世界の一員として仲間入りが出来るのである、このことは奢摩他・毘婆舍那が容易に実践しうる場をもつたことを意味する。

### 第三作願門とは「往生論」に「云何作願。心常作願一

心專念畢竟往生安樂国土。欲如実修行奢摩他故」と説いているようにこれは意業の行であり、一心專念に淨土に往生したいと常に作願するのである。奢摩他とは「止」と訳す言葉で心を一处に凝止して散乱せしめないと言うことである。一心專念に淨土往生を常に作願すると、やがて奢摩他の寂靜三昧の修行になり、この奢摩他行を修することによつて「畢竟往生」するのである。この「畢竟往生」に関して論には「宅門」と言う功德を成就すると説いている。つまり一心專念に安樂国土に生れんと作願して奢摩他寂靜三昧を修行することによつて蓮華藏世界に入ることとを宅に入つという意味で宅門と名付けているのである。（蓮華藏世界の説明は略す）

第四觀察門とは「往生論」に「云何觀察。智慧觀察正念觀彼。欲如実修行毘婆舍那故」と説かれているように智業の行であり、毘婆舍那とは「觀」と訳する言葉である。第三奢摩他寂靜三昧の境地を得る事によつてそこに智慧の目が開け（無分別智）その智慧（無分別後智）をもつて正念に彼の安樂国土の種々なる功德莊嚴を觀察す

るのである。即ち智慧の目を開いて肉眼ではみることの出来ない境界（三蔵二十九種莊嚴）を觀見するのである。この觀察門は「屋內」と言う功德を成就するのである。

毘婆舍那の修行によつて一心に淨土の莊嚴を觀察することによつて安樂淨土に於いて種々の法味樂を受用するのである。

以上は五念門中の前四門について述べて来たわけだが、こゝで五念門と瑜伽行との關係を述べてみると、この瑜伽行の瑜伽とは *Yoga* の音訳であり相応と漢訳され、隨順とも異訳され奢摩他・毘婆舍那の觀行に依りて正理に合致し、これに相應する状態を瑜伽というのであるから、ある基礎に結びつくものと解することが出来る。従つて瑜伽されるものは「往生論」にあつては三蔵二十九種の淨土を指すことになる。瑜伽行派の根本聖典とされている「解深密經第三分別瑜伽品」に瑜伽他（止）・毘婆舍那（觀）をもつてその主体となし、その中奢摩他は無分別影像を所緣として心を平等寂靜ならしめ、毘婆舍那は有分別影像を所緣として所智の義の中に於いて周遍觀察

することを示し、さらにこの止觀の双運行によつて始めて清淨法身を得ると説いている。即ち止觀を主体とした一切の觀行を瑜伽行と名付けているのである。よつて奢摩他（第三作願門）・毘婆舍那（第四觀察門）とそれにこの兩者を結合させる相応行（第二讚嘆門）を瑜伽行と言うことが出来る。以上のことからみても「往生論」全体が瑜伽行とかゝわりのあることがわかり、この「往生論」に示されている相応行・奢摩他行・毘婆舍那行は全て瑜伽行を根底とした実践行を説いていることが明確である。

次いで第五廻向門とは「往生論」に「云何廻向。一切苦惱衆生。心常作願廻向為首。得成就大悲心故」と説かれてゐる。即ち一切苦惱の衆生を救済することを目的として心に常にそのことを作願する事によつて利他の大悲心を成就することを得るのである。この廻向門は「園林遊戲地門」と言う功德を成就する。即ち前四門を修行して得た淨土往生の功德を一切苦惱の衆生に施し、救済して共に淨土に往生させるのである。